

「15年戦争期の日本プロテスタント・キリスト教会」

同志社大学神学部
原 誠

1、日本のキリスト教の歴史的中間点としての戦時下

戦後60年以上経過した現在、15年戦争期のプロテスタント・キリスト教会が体験した事柄は、その時点での到達点といえる。

「日本基督教団」(以下、教団と称することがある)が成立したのも、この時代である。教団の成立についてすら、共通の認識をうみだすものではなかった。しかし歴史的、神学的には土肥昭夫の「第一篇 概観」(『日本基督教団史資料集』第1巻、3~29ページ)(1)の論文においてもはや確定した。土肥昭夫の見解は、宗教団体法の成立が日本基督教団設立の要因であるとしつつ、その内在的要因をも問い、日本の教会の教会概念があいまいであったこと、戦時下の反キリスト教的風潮のなかでの自己防衛、自己保存を求めて成立したというものである。

2、明治期以来の日本のキリスト教の歴史的特質

明治期以後の日本のキリスト教の特質は、「内村鑑三の不敬事件」に代表されるのではなく大浜徹也が『明治キリスト教教会史の研究』(吉川弘文館、昭和54年)で、近代日本のキリスト教は「近代文明の先導者として」、「教勢において小なるものといいつながら、社会人心の嚮導者たるてんにおいて大なるものであった」とし、さらに「日本のキリスト教神学者は、日本におけるキリスト教を日本人として内在的に問い直す努力をすることもなく、直輸入的な牧会学や宣教学を説きがちであり、そのため日本のキリスト教界はキリスト教者の日常的なるありかたとかかわりなく、あたかも近代の『先駆者』であるかのごとき幻想に浸り、時代の状況に流されるなかで発言しつづけたように思う」(2)と指摘したことに尽きている。

3、ファシズム時代と「宗教団体法」

このようなキリスト教は、不敬罪や治安維持法と並ぶ弾圧法、統制法である宗教団体法が成立しようとしたときにさえ、教会の指導者の一部と多くの信徒のなかには、これによって教会が保護されると理解した。

4、15年戦争期のプロテスタント教会の諸相

「見える教会」として時代の諸制約を受けた歴史的、社会的存在であった教会を理解するためには、この時代の法制史的側面、社会思想史的側面など、立体的総合的に、そして神学的に分析することこそが重要である。もちろんこの時代に「迫害」を受けた個人や「弾

庄」を受けたホーリネス系の教会もあるが、それらが教会の一般的な状況を代表したわけではない。この時代の教会の伝道活動は、なお活発に継続されていた。したがってこの時代のキリスト教会のありようは、信仰者であるがゆえの実に「転向」ですらなかった。教会の1941年の受洗者の数は5900名であった⁽³⁾。(因みに2006年版『キリスト教年鑑』によれば、プロテスタント教会全体の1年間の受洗者の数は4900名である。同、1397ページ)。教勢の低下は1943年以後である。都市住民の疎開の開始、あるいは本土空襲の開始によって礼拝出席の低下が起こったのであって、当時の社会一般の反キリスト教的風潮によるものではない。

従来指摘されなかったことは戦時宗教報国会である。教団の組織は戦時宗教報国会の組織でもあった。教団はこれによって戦時下の住民統制の一端の担う宗教分野の一部として機能した。

この時代にいわゆる「日本的基督教」は、根本的にはミッションフィールドに成立した非キリスト教世界の教会の全てが何らかの意味で関わらざるを得ない課題であるものの、日本の場合にはアニミズムを根底にして、とりわけ明治国家によって規定された「神社非宗教論」に基づいて展開された国家神道との整合性をキリスト教会としていかに整合させるか、という論理を求めて行った。その多くは、論評にも値しない迎合を示すものが圧倒的であったが、そのなかで魚木忠一のキリスト教を「触発」として捉え、キリスト教の歴史的な成立と展開をそれぞれの特徴をもった「類型」として分類し、いわゆる「日本類型」を提示したことの意義は、今日の宣教学に一つの視点を提示しうるかもしれない。

国家はキリスト教会の抹殺を目指したのではなく、ファシズムによる天皇制国家の内に存在する教会、大政翼賛政治の枠の中に存在する教会であることを求めたのであった。

5、結論

明治以後、約半世紀を経過した日本のプロテスタント・キリスト教会は、この15年間の天皇制ファシズム体制の戦時下においては、国家政策の枠の中でしか存在することができず、国家を超える、あるいはそれを相対化する信仰と神学を形成できなかった。また特殊日本の「近代化」過程は、個人の尊厳や多様性を求めていく「近代市民社会」の形成を目指したものではなかったゆえに、重層化して現出した近代天皇制国家の本質を見抜く信仰の質と神学を形成することができなかった。加えて「罪」を個人倫理としてしか受容できなかった、といえるであろう。

(1) 『日本基督教団史資料集』は、日本基督教団宣教研究所に1979年に設置された教団史資料編纂室によって資料収集が開始され、1997年から2001年にかけて全5巻として刊行された。以下、『資料集』と略す。

(2) 大濱徹也『明治キリスト教会史の研究』吉川弘文館、1979年、1～2ページ。

(3) 『日本基督教団史資料集』(第5巻)、164ページ。